

# 手記 東日本大震災から2ヶ月

栗原市立栗原中央病院

診療放射線技師長

引地健生

## 東京脱出、震度7の栗原へ

3月11日14時46分、私は東京都港区にある医療機器メーカーP社の本社ビル1階にいました。昨年導入された新しいMR装置の操作トレーニングのためです。管理職でありながらも、再びMRIの魅力から逃れられずに自ら参加した研修会でした。

突然の大きな揺れ、激しくはないものの、振幅の大きな長時間の揺れに壁や天井がミシミシと音を立てていました。思わず机の下に身を隠そうかと本気で思ったほどです。その時は、研修室にいた皆が関東地域で大地震が発生したのではないかと考えていました。まもなく、ビルは免震構造であることを知らされましたが、天井の崩落や建物倒壊の恐怖を感じるほどの揺れでした。震源地はどこなのか、東京の震度はいくらだったのか。やっと情報が入ってきたのは15分程経ってからだったのでしょうか。震源地は宮城県沖、最大震度は栗原市で震度7とのこと。その事実を聞いた瞬間から直ぐにでも宮城に飛んで帰りたい焦燥にとらわれたのでした。

その後、研修室に待機するものの、仙台の様子、栗原の状況はどうなのか、居ても立ってもいられずテレビのある警務員室に案内していただきました。最初に目に入ってきた映像が、自衛隊のヘリコプターのカメラが捉えた、名取市閑上の名取川河口付近から田畑をなめ尽しながら家屋を押し流す津波の様子でした。信じられない光景に愕然として立ちすくむしかありませんでした。あの画面の上方、東部道路の海側に私の母の実家はあるのです。

都内の公共交通機関は直ぐに全面ストップの状態、東北新幹線も不通となり、その日の内に仙台に戻れないことは確実となりました。夕方以降、ビルの外には帰宅者の車と歩行者が道に溢れるようになり、夜半過ぎまで道路は大渋滞で車が止まったまま、歩道には長い行列が続いていました。その晩はP社ビル5階の会議室で、災害時用の赤飯とラーメンにお湯を注ぎ美味しくいただきましたが、余震に怯えながらまんじりともせず一夜を明かしました。その間、栗原中央病院や放射線科スタッフとの連絡を試みたものの、唯一放射線科スタッフからのメールを受信したのが18時26分、「停電しましたが放射線科での救急対応はOKです。第2MRI装置本体がずれて壊れました。患者さん、スタッフにけがはないです」、というものでした。職場での人的被害がないことを確認できたことに安堵しました。

しかし、次々に入ってくるニュース映像に不安と焦燥が増していくだけの無力な自分を思い知ることになりました。仙台市街地での火災発生の様子や若林区荒浜での津波被害の報道、気仙沼での津波の様子とその後一面火の海となった街の惨状等々、テレビ画面に映し出される信じがたい光景をただ呆然と見つめることしかできませんでした。

一夜明けてやっと栗原中央病院と家族にそれぞれ1度ずつ電話が通じましたが、それ以降はほとんど通じない状況が続きました。そして被害の状況がさらに明らかになり、東北新幹線も東北自動車道も不通のまま、仙台空港も映像で見たとおり使用不能の状態、東京から東北方面への移動手段が全くないことが判明しました。12日土曜日の内に宮城に戻ることは全く諦めて秋葉原にホテルを確保し、その日はインターネットやテレビ報道で情報収集に努めました。どうやら羽田空港から仙台空港の代替空港として福島空港・山形空港・庄内空港への臨時便が飛ぶことが分かりましたが、インターネットで予約を取ろうとしても既に満席の状態で歯がゆい思いが募るだけでした。翌13日日曜日には直接カウンターでキャンセル待ちすることを決め、朝から羽田空港に足を運びました。ところがカウンター前には既に長蛇の列、窓口係員に聞くと「福島空港行きのキャンセル待ちは140名」、とのこと。仮に搭乗できたとしても郡山から仙台までの足が確保できないようでした。路線を調べつくし、新千歳経由花巻行きや伊丹経由花巻行きの可能性があることを知り第1ターミナル・第2ターミナルを行ったりきたりしながらチケットを確保しようとしたものの、なんと花巻空港も震災で昨日から閉鎖中とのことで、翌日も再開の見通しはついていないようでした。一般道でもいいのでレンタカーを走らせようかと、空港のレンタカー会社に駆け込み仙台乗り捨てで貸してもらえないか交渉するも、あっさりと断られ、さらには「途中でガス欠になっても給油できない可能性が高いですよ」、とのこと。肩を落として夕方には秋葉原に戻ったのでした。秋葉原の駅員さんに声を掛けて東北新幹線の復旧状況を尋ねると、手前からはるか向こうまで架線の電柱が斜めに倒れた写真を見せて、「高架橋も所々損傷しています、復旧の目処は全くたっていません」、とのこと。その時点で東北新幹線の被害状況が甚大であることが初めて分かりました。万策尽きた、と感じました。朝ホテルを出る際に、引き続き東京に足止めになった場合に備えてもう一晚連泊の予約を取っておいたのは正解でした。ホテルマンの「こんな状況なので、連泊が不要になってもキャンセル料は頂きません」、との言葉に甘えさせてもらったのでした。

運命の14日月曜日、朝食をとりながら朝日新聞に目を通してしていると、新潟そして山形

経路で仙台まで戻れるコースが前日13日に確保されたことを知らせる囲み記事があるのではないですか。直ぐにホテルを後にして東京駅に向かい、9時過ぎの上越新幹線に飛び乗り、11時前には新潟に到着。新潟駅の高速バスチケット売りの20人程の列の最後尾に並びました。ところが、聞き耳を立てていると2日後のチケットしか買えないとのこと。そこで私がとった行動は、まずタクシー乗り場へ移動、山形までの運賃を確認、高速バスチケット売り場まで戻り勇気を出して大きな声で一声、「今日中に仙台まで戻りたい人はいませんか、4人で山形までタクシー代が4万円です」と。そうして私の他に3人の男性とタクシーに乗り山形を目指しました。話をすると、一人は地震を研究中の大学院生、一人は長年原子力発電所で放射線量を測定する仕事をしていたという、いかにも理工学系研究者の雰囲気を感じさせた初老の男性。偶然とはいえ、時の話題に事欠くことはありませんでした。小国峠を越え、国道13号線を北上してもう直ぐ山形市に入ろうかといった辺りで運転手さんが、「ここまで来たので仙台まで行ってしまいますか?」、と提案。トータルの料金が若干増えることを4人全員で了解し、仙台までお願いしたのでした。

国道を走りながら驚いたことは、その時点で山形県内ではガソリン不足が始まっていたということ。新潟県内ではまったく見られなかったのに、山形県に入って間もなく、対向車線はガソリンスタンドを先頭にして延々と自家用車が列をなしていたのでした。山形市内でも同様の状況でした。午後4時半頃だったと思います、やっと仙台市内にたどり着きました。1人あたり14,500円で済みました。新潟市内に2泊して、さらにバス料金が掛かることを考えると、2日早く、そして安く帰ってくる事ができたのです。その日は仙台の自宅で家族同士お互いの無事を確認し、翌朝栗原市に向かうことにしました。

さて、仙台からどうやって栗原に向かうのか。足がありませんでした。栗原から東京へはくりこま高原駅から新幹線に乗ったので、自分の車は築館のアパートに置いたままです。前日のテレビのテロップで、「仙台から佐沼行きのバスが2本出る」との情報が流れていました。少なくとも古川までは行けると思い、



3月15日早朝、仙台駅前にて

どこから出るのかも分からないまま早朝から仙台駅前まで出かけました。ところが誰もそんなバスのことは知らない様子、仕方なく情報収集のために仙台市役所まで逆戻りし、「広瀬通一番丁から出るらしい」、と聞いてたどり着いても、はたしていつ来るのか分かるはずもなく途方にくれていました。すると声を掛けてくる人がいるではないですか。「私達も佐沼まで行きたいのですが、タクシーで一緒に行きませんか」、とのこと。聞けば、韓国からの新聞記者とその通訳の方でした。タクシーを止め、「築館経由佐沼まで」と行く先を告げると、運転手は一瞬燃料計に目をやり、一言「帰って来れそうだなあ。」 こうして15日火曜日午前10時30分、やっと築館まで戻ることができました。ここで驚いたことは、道沿いの民家は全く倒壊した様子がないということ。今回の地震で最大震度の震度7、絶対に築館の家々は無残に崩れ落ちていたのだろうと思っていたのです。私のアパートも概観は全く異常なし、ところが、恐る恐る扉を開けると、そこはもう足の踏み場が全くないような状況でした。部屋中に本が散乱、台所にはガラスコップの破片が飛び散り、悲惨な状況でした。やはりここは震度7で揺れたのだと実感したのでした。



3月15日10時30分頃、築館の自室

## 災害対応そして病院機能の維持

3月11日14時46分の地震発生直後、栗原市立栗原中央病院には病院長の指揮の下に災害対策本部が設置され、災害時医療の体制が敷かれました。患者様、職員等の人的被害の有無、施設や設備に関する被害状況について直ちに情報が収集されました。病院本館は多段積層ゴムとダンパによる免震構造であり、幸いなことに本館には全く損傷なく、人的被害も報告されませんでした。4月7日の余震の際も同様でした。平成20年6月に発生した岩手・宮城内陸地震での震度6強、3月11日の震度7、4月7日の震度6強、これらの大地震を経験してもなお病院機能を維持するに十分な免震性能の高さには

驚嘆の一言です。

ただ、昨年3月に別棟に新設した第2MRIは大きな損害を被りました。建物自体は耐震構造であり震度7にも耐えたのですが、MRI装置本体は激しく突き上げるような上下動とそれに続く水平方向の大きな揺れに翻弄され、カバーが外れ本来の設置位置から大きくずれてしまいました。地震発生時はちょう



カバーの外れた第2MRI装置

ど患者さんをスキャン中でした。担当者は自分の足元もおぼつかないままスキャンルームに入り、激しい振動の中で必死に患者さんを引き出し、スキャンルーム外に誘導したとのことでした。揺れがおさまって本館に戻ると、必死の形相の自分に対して、他のスタッフ達の意外にも落ち着いた様子に気が抜けてしまったと、その担当者は振り返っていました。

私が病院に復帰したのが15日火曜日の午前11時前、すぐに、連日招集されていた拡大幹部会に参加し、栗原市災害対策本部からの情報や病院のインフラに関する状況、震災関連の外来患者数・入院患者数、各部署からの報告等々、情報の収集・周知徹底を図るための体制が整っていることを知りました。随時招集される拡大幹部会と、ほぼ毎朝8時から開催される各診療科医師を交えた全職種による全体ミーティングにより情報の共有と刻々と変化する状況の把握が図られました。震災に関連する患者さんの診療を最優先する災害時診療体制は18日金曜日まで継続され、22日火曜日からはほぼ通常の診療体制にもどされましたが、拡大幹部会と全体ミーティングは29日火曜日まで随時招集されました。

その間、最大の関心事は常に病院機能を維持するための各種インフラの状況でした。電気は14日14時から試験通電が開始されたものの、院内の冷暖房ならびに自家発電を行うために必要なA重油の供給が安定せずに綱渡りの状態が続きました。栗原市のほぼ全域が復電したのは17日になってからでした。エレベータの使用制限をはじめとして徹底した節電対策がとられました。放射線科としては、18日までは一般撮影とCT検査、そして必要最低限の回診撮影のみの対応としました。水道に関しても17日までには市の



8割が通水されましたが、その間は栗原市からの給水に頼らざるを得ない状況でした。また、水道が回復しても時々出る赤水のために、度々給水タンクの水を入れ替えることを余儀なくされました。トイレの使用制限、入院患者さんの入浴制限等々の節水対策が実施され、急場をしのいだのでした。

その他にも、医薬品、液体酸素、入院給食のための食材等の確保のために各担当部署が毎日奔走していました。医薬品については、一部国内生産品が震災の影響で製造停止となったことが報告されていました。液体酸素についても供給が滞り、栗原市を通して宮城県に確保を依頼するという状況でした。入院給食については、一時はメニューを立てられない状態が続き、栄養科の皆さんは大変苦勞していました。そんな中、ある宿泊施設が無償で食材を提供してくれると聞いたときには感謝の気持ちでいっぱいでした。

3月11日からの災害時診療体制における外来受付は次の通りでした。

まず、一般診療なのか震災関連なのか、一般診療であれば基本的に処方のみとする。震災関連であれば重症度を判定した上で適切な診療科での診察・処置を行う。外来受付にはベテラン内科系医師と看護師2～4名、医事課職員2名を配置して対応しました。

## 後方支援

通常の診療体制に戻った22日火曜日からは、栗原中央病院は後方支援病院としての性格を増していきました。石巻赤十字病院から3便のヘリコプター搬送により被災者を受け入れたのをはじめ、気仙沼市立病院・大崎市民病院・南三陸町の避難所等から24時間体制で受け入れを行いました。石巻赤十字病院から搬送された患者様の中には身元不明の方もおられ、栗原市社会福祉課と連携をとりながらの対応となりました。

25日月曜日には、佐藤栗原市長が栗原市内の6施設に沿岸部被災者を受け入れることを表明し、4月3日日曜日に南三陸町からの第1次避難者77世帯・193名を若柳ウエットランド交流館・花山少年自然の家・花山石楠花センター・栗駒みちのく伝創館・金成延年閣・一迫老人福祉センターの6ヶ所に迎えました。同時に栗原市立3病院・5診療所と栗原市医師会が分担して避難所への巡回診療を開始し、この5月もまだ継続しています。栗原中央病院は、医師・看護師・事務の医療チームが休日も含めて主に若柳ウエットランド交流館・花山少年自然の家を巡り、不自由な避難生活により体調を崩す方々へ医療

支援を行っています。また、過酷な体験をした被災者の心のケアや精神障害者の支援のために、精神科専門医師による巡回診療は6ヶ所すべての避難所を対象として行われています。さらに、エコノミークラス症候群や小児を対象とした診療もそれぞれの専門医師により実施されています。

## 4月7日の余震、トリアージ

避難所の巡回診療を始めたばかりの4月7日23時32分、またしても栗原市で最大震度6強を記録する余震が発生しました。3月11日の本震によるダメージが癒されぬ間に、この余震です。精神的・肉体的ダメージはさらに増大したように感じました。時間的には短かったのにもかかわらず、3月11日の震度7よりも今回の震度6強の方が家屋に対する影響も大きかったようです。放射線科内にも、「床の間の壁が崩れた」、あるいは「はなれが傾いた」というスタッフがおりました。栗原市役所のある築館の街の中でも、看板が落ちたり、窓ガラスが割れたりしていました。

その晩は、地震がおさまると同時に病院に駆けつけ、同じく参集したスタッフ7名と共に機器の点検を行い、けが人等の救急搬送に備えました。午前2時すぎまでに20人のけが人が救急車で搬送、あるいは自家用車で来院し、10数名に対してX線撮影、CT検査を実施しました。2時30分には「緊急配備」が解除されて、その晩の当番1名を残してスタッフを帰宅させて朝からの診療に備えさせました。連日の余震に肉体的にも、精神的にも皆が疲弊している様子でした。私のみならず多くの職員が、常に揺れている感覚「地震酔い」の症状を訴えていました。

4月7日深夜から8日未明にかけては本格的なトリアージが実施されました。救急外来入口に外科系医師、看護師、医事課職員を配置しトリアージカードを使用しての対応でした。救急外来、外科外来・中央処置室、整形外来で処置等の診療にあたりました。午前2時20分までの救急患者は合計20名、頭部外傷を含めた打撲・捻挫・切創等の軽症者が15名、入院を必要とした在宅酸素療養患者・脱臼骨折等の中症者が5名、重傷者はありませんでした。軽症者の中にはパニック障害の女性がいたことから、度重なる大きな地震が人々に与えるストレス・恐怖がいかに大きいものであるかがうかがわれます。



## 失われた尊い命

今回の震災と大津波で失われた尊い命、そして未だに安否が分からないままの人々。岩手・宮城・福島で暮らす人にとって、東日本太平洋沿岸部の被災地の方々はもとより、内陸地域に暮らす人々にとっても、肉親・親戚・知人・友人に犠牲者が一人もいなかったという人はいないのではないのでしょうか。私の場合も、同じ診療放射線技師の同級生と従姉妹を失いました。

仙台で働く同級生の彼女は石巻で、お父様の介護のために自宅に戻っていたあの金曜日に津波に襲われました。連絡が取れないまま職場の同僚たちが捜索に出かけ、瓦礫に埋まった1階の部屋の中で12日後の23日に彼女とお父様はやっと発見されました。「3月としては厳しい寒さのせいかな遺体の腐敗等は全くありませんでした。警察に通報して遺体の収容をお願いしましたが、いつになるか分からないと言われ自衛隊を見つけて遺体の収容をしていただきました」、と捜索に当たった彼女の同僚が教えてくれました。彼女のお父様は目と脚が不自由だったことを後から知りました。あるいは彼女は、最後までお父様を守るために、その場を離れなかったのではないのでしょうか。一階部分は瓦礫に埋まっていたものの二階には津波の痕跡はなかったことを聞いて、熱いものが込み上げてくるのを抑えられませんでした。あの日から1ヶ月が過ぎた4月12日にやっと茶毘に付され、15日金曜日の晩には仙台で「偲ぶ会」が催されました。在りし日の彼女の遺影の前には百数十人の友人・知人が集まりいつまでも別れを惜しんでいました。

私の年上の従姉妹は宮城県南部の仕事を地震に遭遇し、ずっと安否不明のままです。それが1ヶ月以上たった4月14日木曜日になって、亘理町の遺体安置所に収容されていたことがやっと判明しました。彼女は草花が大好きで、去年は名取市の休耕田に2万本ものひまわりを植えていたことを彼女の葬儀・告別式ではじめて知りました。ご主人が会葬御礼の中で話してくれました。その種を手渡ししながら、「このひまわりで彼女をいつまでも覚えていて欲しい」と。3月11日から44日目のことです。

その従姉妹の実家は名取市閑上の手前にあり、私の母の実家でもあります。東京品川のP社本社ビルのテレビで見た、あの家々を押しつぶし田畑をなめ尽くして進んだ津波はその家の1階部分も水没させました。幸いなことに家が流されることはなかったのですが、自宅の周り是一片が押しよせた瓦礫で埋もれてしまったとのことでした。私が訪ねた

のは、震災から44日目従姉妹の葬儀・告別式の日のことでした。「やっと一昨日、自衛隊がやって来て敷地内の瓦礫を撤去してくれました。少しは片付きました」、が私と会ったときの家人の第一声でした。居間も、仏間も、寝室も、台所も、風呂場も全てが泥水に浸かってしまい、畳も襖も取り払われて、柱と壁にくっきりと残った泥水の跡に対峙して、



大津波後の名取市閑上地区

その非日常の空間に安心してしまった自分が立ちすくんでいました。瓦礫と共に人も流されて来ていました。納屋の前では瓦礫に埋もれて白髪の女性が、屋敷の東側入口付近には小学生くらいの男の子が、南側境界付近には別の成人男性が息絶えていたことを聞くにつれ、あのテレビ映像の津波の中にいったい幾つの魂が必死にもがき苦しんでいたのかと思うとき、言い知れぬ無力感と心が凍りつくほどの絶望感を覚えました。

仙台の自宅の隣家のご主人からは、家族の中で一人だけ生き残った高校生の女の子の話の話を聞きました。親戚のその女子高生は家族と共に流された時の様子を次のように語ってくれたそうです。「海水はヘドロ混じりの黒々した重たい水で、身動きができなかった。自分も含め皆がその黒い海水面に頭だけを出していた。家族だけではなく沢山の人が顔だけを出した状態で流されていた。顔だけが幾つも浮かんでいた。海面に浮かんだその頭が、顔が、しだいに遠く散り散りに離れて行って私だけが残された」、と。その子の心に重たくのしかかり、いつまでも消えることのない家族の最後の記憶。その話を聞いて、私はあふれ出る涙を止めることができませんでした。私達はその子にどんな言葉をかけることができるでしょうか。この先一生涯にわたって、その記憶を胸の奥深くに抱えて生きていかなければならないその子に安らぎの日は来るのでしょうか。

テレビ報道が映す被災地や避難所で暮らす人々は健気にも前向きに生きてゆこうとする姿を見せています。でも、その笑顔の裏側には、言い表すことができない程の悲惨な記憶を密かに抱えているのだということを忘れてはならないと私は思っています。

あらためてこの震災と大津波で亡くなられた方々のご冥福をお祈りすると共に、いまだ

に不自由な避難所生活を余儀なくされている被災者の皆様に心からのお見舞いを申し上げます。そして、心に深い傷を負った方々が一日も早く癒されますように願っております。

## 感謝の気持、そして復興へ

災害派遣された自衛隊員の皆さん、全国から支援に来ていただいた警察官・消防士の皆さん、遠く海外から支援に来ていただいた皆さん、そして全くの自由意志での物資提供、瓦礫の撤去、アルバム等の思い出探し、炊き出し等々で尊い意志を実践して示してくれた一般ボランティアの皆さんに心からの敬意と謝意を表明いたします。皆さんは、初期の災害救助から生活支援まで、復旧・復興への礎となってくださいました。

また、自分の休日を使って避難所の保健支援に協力した看護師の皆さん、沿岸地域の業務支援にあたった薬剤師の皆さん、救援物資を募って南三陸町まで届けた放射線科のスタッフ等々、ボランティア活動により被災者の支援にあたった栗原中央病院の方々、大変お疲れ様でした。

そして、災害時診療体制の間、栗原中央病院職員の皆さんが自主的に食材を持ち寄り、院内待機をしている職員に対して連日炊き出しをしていただいたこと、この場をお借りして心より御礼申し上げます。皆さんありがとうございました。

3月11日から60日目、栗原市の災害時体制が「第3号配備」から「第2号配備」に引き下げられました。しかし、沿岸部ではまだ復旧作業が続けられている現状です。

私達ができることには限りがあります。でも、沿岸部の美しい風景が再生されることを夢見て、できる支援は続けていきましょう。

そして、医療職たる私達は、沿岸部被災地の一日も早い復旧・復興を祈りつつ、失われた尊い命、その命の重さをしっかりと受け止め日々診療に務めていきましょう。



3月6日朝 美しい志津川湾